



ハートフルナース

その思いに応えるために

〜積み重ねた経験から

今後の学習支援法を模索〜

「ラストチャンスと思い最期まで頑張りたい！日本で働き、日本の医療を学びたい！」と強い思いを看護師国家試験前に語ってくれたのは、ゼアさん。

当財団の支援のもと元EPA看護師候補者4名が看護師国家試験と愛知県准看護師試験を受験しました。4名のうち、ゼアさん、メティさん、コイマさんの3名が第67回愛知県准看護師試験に合格しました。会員の皆様によくの期待をいただきましたが、残念ながら看護師国家試験の合格者の輩出には至りませんでした。しかし、日本で看護師になりたいという彼女たちの強い気持ちは消えていません。



ゼアさん



メティさん



コイマさん

来年度の看護師国家試験の学習支援に向けて

JAMNA 研究員 小笠原 広実さん

今年の全国のEPAインドネシア人看護師の国家試験合格率は5.4%であり、相変わらず高いハードルであることを再認識しました。試験時間の延長に加えて、今年からはすべての漢字にルビをふるという対策が取られています。私の関わった看護師たちの状況を考えると、ルビは、問題を解く上であまり役に立っていないように思います。それ

以上に、文化や医療事情の違いによって、インドネシアの看護教育や看護の概念、看護師の役割が日本と異なっていることが大きな壁になっていると予測しています。実際にインドネシア人看護師たちと国家試験問題を解きながら、なぜ判断が違うのかを繰り返し考えたり、またインドネシア人看護師が現地のクリニックで働いている状況を観察したりする中で、こういったことが少しずつ分かってきました。さらに看護師試験の合格には、単純な専門知識の蓄積ではなく、日本語長文の読解力、看護の幅広い知識と判断、日本人社会についての理解などすべてが必要になります。

約6か月間の学習支援活動の中で、貴重な体験ができたことに感謝しつつ、わかってきたことを今後の支援に活用するとともに、EPA看護師支援に取り組んでいる他の方々にも発信し共有していきたいと考えています。

また、ジャカルタに赴任家族として滞在している日本人の元看護師たちが、学習支援に大きな関心と応援の気持ちを寄せてくださっています。来年度は、この看護師の方々の協力を得ながら、よりよい支援ができるよう模索していきたいと思っています。また日本人の元看護師たちも、支援を通じてインドネシアの看護師への理解を深め、将来、日本とインドネシアの看護の架け橋になるきっかけにしたいだければ幸いです。来年度も、本気で日本で看護師として仕事をしたいと思っている方たちに、再度チャンスを与えるための支援に取り組んでいきたいと思っています。



インドネシアで看護セミナーを行う、小笠原広実研究員